

川口衛先生の描く 真円の真ん中に

構造家・阿藤有士

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco

■法政大学の旗の元

本誌2020年7月号の特集（「代々木」からのメッセージ）の内容から覇志堂との会話は始まった。「レガシーとしての代々木」の執筆をしたのが、川口衛構造設計事務所の管理建築士の阿藤有士さんだ。耐震診断・改修計画を川口衛先生の元で行ったご本人である。30年前以上前から、他の公共の建物にむしろ劣らずメンテナンスはしっかりやっていたという。川口先生自らケーシング部を開けて、モルタルに水が入っていないかなど確認したそうだ。

1955年、山形県酒田市生まれ。両親の職業の教師にはなるまいと決めて、ものづくりが好きだったからと法政大学へ。川口先生の講義が一番好きで皆勤賞。さらに川口先生に「意匠志望ではないの?」といわれながらも大学院に合格して4年間、学術書に没頭。一部屋を占領しての恵まれた院生生活を過ごす。法政大学には青木繁さん、大江宏さんなど充実した教授陣がいらした。いくら何でもそろそろ就職をとったときに、「1から10までできるところで仕事がしたい」と相談すると先生は「そういうことで」と一言。「それは入所しろということだよ」とよき先輩の阿部優さんがいうのでビックリしたそうだ。4年で辞めてもらうとの意向が、すでに15年経ったところにお聞きすると「いてもいいのではないか」という返事。コミック漫画のようなやり取りを経て、川口衛構造設計事務所で40年間なのです。

■振り返れば先生

長く続いたのは、「仕事が面白かったから」だ。次々に入る大きな仕事に所員を適材適所に柔軟性のある配置をするから飽きなかった。新人であろうとポンと一つ建物を預けられるのが川口事務所流だが、阿藤さんの場合は住宅だった。何を質問していいかわからないくらいなのに設計時間もタイトな仕事。川

口先生が手取り足取り教えてくれるわけではない。そんな苦悶する阿藤さんの後ろに何か気配を感じると、先生が立っていてじっと図面を見ているのだった。

川口先生が怒っている姿は想像ができないが、「叱られたことはありましたよ」と笑う。シンガポールの計画案で、丹下事務所との打合せから帰って報告するとただ一言、「もう一度行ってきなさい」。声を荒げることはないが、普段は「阿藤」と呼び捨てなのに、怒ると「阿藤君」と呼び方が丁寧になった。事務所の打合せ室には大きなパネルの遺影がある。「目を見ればいいたいことはだいたいわかりました」と、遺影に向かう愛弟子の姿がある。フリーハンドで真円を描いたら完璧という川口先生に、もう一度会いたいと思うのは阿藤さんだけではないだろう。阿藤さんの顔は、所員さんに対しての態度は師と同じと出ています。

■日向駅舎で構造デザイン賞

郷里の酒田に帰ると、好きな「土門拳美術館」に必ず見に行くというし、趣味も建築の人だといえる。

川口事務所の所員でありながら、個人で第三回構造デザイン賞を受賞している。建築家・内藤廣さんが設計した日向駅舎には10年以上もかかわった、スタートとフィニッシュを除くほとんどすべてを阿藤有士さんは任されていた。「先生は集中やる仕事がお好きだったし、「これは君の仕事だったろう」「阿藤有士で受賞するように」とおっしゃったのだった。入社して3年目からはチーフとして、事務所を背負ってきた阿藤さんへの先生からのプレゼントだったのではないか。その心は師の大きな愛。

2020年7月号の執筆お礼を言いながら覇志堂の胸にも、ジーンと来るものがあつたのでした。

